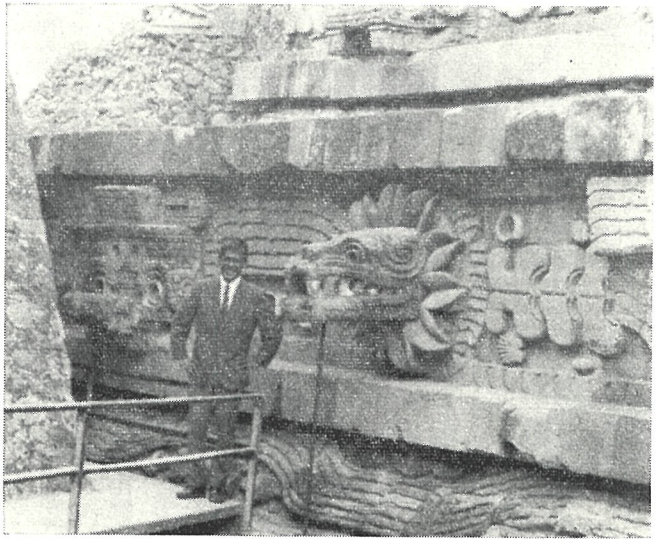
# アメリカ漫遊記

井植博晃
上辻章一

## アメリカの家庭

僕たちの旅行中、いくつかのアメリカ人の家庭に招待されたり、訪ねたりする機会を持つことができた。もちろん、これから述べることが全てアメリカの家庭に当てはまるなどとは思いもよらぬことであることを、まずおことわりしておかなければならない。僕たちも出発前にアメリカの家庭やその人々について、この程度のものであろう、というばくぜんとした考えを持っていた。そして実際に、それが当てはまることもあったし、またそうでない場合もあった。

僕たちがバス旅行を始めて間もなく、ソルトレイクシティからデンバーへのバスの中で知り合った見ず知らずのアメリカ人の家に招待されたことがあった。僕たちはそこでまず日本的感覚をみごと打ち破られたのである。というのは、そのアメリカ人のいう「デンバーの近く」という言葉によってであった。その日、デンバーで一泊する予定であった僕たちは、彼の家に泊めてもらうことにした（もちろん、その晩の宿泊料がただになるという、しごく簡単かつ魅力的な理由からであったのだが）。その家というのがデンバーの近くどころか、日本的感覚でいうとそれは遥か彼方の、車で二時間余りも離れた山奥であった。しかし、これは彼にとって、しごく当り前の表現であったに違いない。それはともかくとして、彼の家は



メキシコのピラミッド基底部

ウェスタン風のシャレた作りで、猟銃を見せてくれたり、歌を歌ったり、彼の手作りの料理をごちそうしてくれ、楽しい一夜を過ごした。しかし、翌日には仕事があるからといって、朝六時頃、僕たちを起こすとバス・ターミナルまで送りとどけ、「さよなら」の握手と共に後も見ずに立ち去ってしまったのである。この時のアッサリした清々しいような気分は、今でも心の底に深く残っている。どこの家庭に行っても、そういった良い意味での割り切った考え方が見られた。楽しむ時には大いに楽しみ、決して相手を退屈させないで、自分たちも心の底から楽しんでいる。しかし何事においてもはっきりけじめをつけて行動する。こういう精神がどこから生まれてくるのかを考えると、それは小さい子供の頃からの親の教育に見出されるように思う。そのよい例として、バスの中や町角で見かけた小さい子供のむずかるのを人前かまわずピシピシやっている母親の姿からも想像できる。そういう躾のもとで育てられ、ある程度の年令に達するとそれから先は子供の自主性にまかせるという方法をとっているようである。

話が横道にそれたがアメリカ人の家をたずねた時、まず第一にたずねられるのは、何日泊りたいのか？　どこへ行きたいか？　という質問である。そしてわれわれの希望の範囲内で、彼らにできる限りの親切さで歓迎してくれるのである。たとえば、母親の忙がしい時には父親が、息子が、というふうに分担して、手のすいている者がお相手をし、案内をしてくれるのである。

この旅行中に訪れた家々で、もっともわれわれを当惑させたのは、多くの人々に紹介してくれる時である。まず第一に、おじいちゃん、おばあちゃんから、結婚した息子や娘たち、はては、会社の人たちに至るまで、行く先々で知人に会うと「この人たちは日本の学生で、夏休みを利用してアメリカを旅行中のA君とB君」「この人は同じ会社のCさんです」というふうである。うれしくはあるが、しまいにはわずらわしくさえ感じてくるのである。

少なくとも、われわれが見た範囲においては、想像以上に家族を中心としており、その中で一人一人がしっかりとした信念を持った意外に思えるほど、地味で家族的な生活ぶりであった。

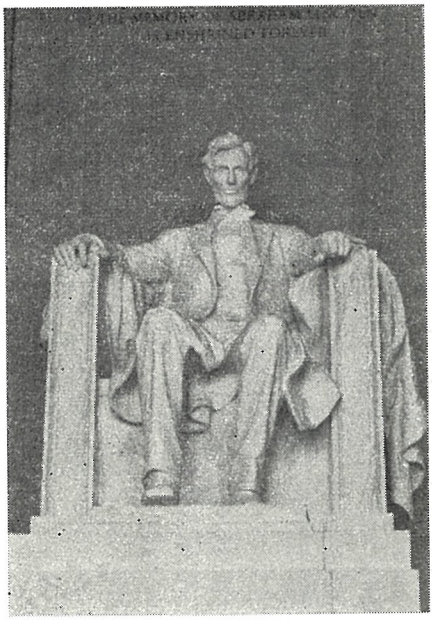
## 黒人差別問題

民主主義の国、自由と平等の国、世界一金持ちの国、ここまでいえば、それはアメリカと誰でも答えるだろう。確かに僕たちも全く何のトラブルもなく、その物量文化におどろき、心おきなくそれを楽しむことができたし、模範としなければならないと思うことで一杯ではある。しかし、その華かな陰に隠されている人種差別というものを見せつけられた時、今さらながら、アメリカそれ自身を、少なくとも全面的には肯定し難いと思ったのである。

人種差別は黒人と白人との間のみならず白人同志の間にもその問題はあるらしいが（小宮隆太郎著、岩波新書「アメリカン・ライフ」）、しかし残念ながら、わずか二、三ヵ月の旅では全くこの点には気付かなかった。しかし白黒問題では、もう一刻も早く南部から逃げ出したくてたまらない気分にさせられた。それを最初に見せつけられたのはミシシッピー州の首都ジャクソンであった。一つの切符売場を中にはさんでH型に二つの待合室を持っているバス・ターミナル。恐るべき臭

いをはなっている便所と狭くて暗い一方の待合室。そして今まで見てきたと同じくらいの全く普通の便所と広くて明るい別の待合室。北部であれほど生々とした眼を持っていた黒人は、ここではまるでイワシの腐ったような輝きのない眼をしているではないか。もちろん、人間が人間を差別しているのを眼前に見せつけられ、はじめは非常に当惑した。しかし、すぐ僕は日本人であるということを喜んだのであった。何故なら、黒人はもちろん、白人の待合室へは行けない。しかし、逆にいえば白人も黒人の方へは入って行けないではないか。幸いなるかな日本人。そして僕らは若くて野次馬根性にも恵まれている。白の方へも黒の方へも出たり入ったりできるのは、ここでは自分だけしかいないと思うと妙に得意だった。そして両方の側から見ることのできる特権を大いに喜こんだのであった。

「どうしてこのように二つもの待合室があるのか」と、その問題を全く知らなかったような口調で、黒人と白人にそれぞれに尋ねたのであるが、僕は妙にその時の彼らの顔と、言葉を憶えている。「そういう習慣なんですよ」と、まるで「昼メシにハンバーグをたべました」というような口調で答えてくれた年老いた黒人。そしてまるで自分の恥部を他人に見られたように当惑した顔をして「ヘエー！そんなもの二つもあるのか」と知らぬふりを装っていた若い白人の兵士……。



ワシントン市にあるリンカーンの銅像

もちろん、南部の白人たちの言いたい気持ちも良くわかるし、そしてそこには深い深い複雑な問題がからんでいるだろう。しかし、そのような問題に対して、われわれは他人事として傍観せざるを得ず、ただただ、そのような問題が少しでも早く解決されることを祈ってやまない、としか書くことができない。そしてそのような問題を考えてからわれわれの日本を見る時、ただその点だけでも平和なものではなかろうか。いくら狭くて貧しくたって、外国からの旅行者にはお金をせびるような子供はいないと確信できる。たとえ、バスにつめ込まれ、まったくのグロッキーになって学校へ通わなくてはならないようなことがあっても、席さえ空いていれば、どこへでも座ることのできるわれわれ。南部の旅行中はもちろん、今もつづくと、その点だけは喜んでいるのである。

## メキシコ人？　日本人？

アデオス・グラシアス・セニョリーター。これが僕たちの知っているスペイン語の全てであった。アメリカの隣りでもあるし、日本と同じくらい、否それ以上に英語は通じるものだと思っていたため、そこへ行くまで何の

心配もしなかった。ところが……である。英語の通じないこと明らかに日本以下である。

まず第一印象は、彼らが非常にわれわれに似ているということであった。日本の田吾作、権兵衛さんの類のお百姓にすごく似ている。僕たちは旅行中、内緒話は彼らに通じないので全く堂々と日本語でしゃべっていたのであったが、一度こういう失敗があった。メキシコ市行きのバスを待っていたとき、非常に日本の女中さんに似ている女の子がいた—いわゆる背が低くて顔が丸く、上を向いた鼻と健康的な赤い頬を持っている—もちろんメキシコ人だと思ったから、「この女の子、日本の女中さんにそっくりやなァ」と本人を眼の前にしてしゃべっていたものであった。するとその女中さん、ふとこちらを見て「君たち日本の方ですネ！」（れっきとした日本話で！）

とにかく日本人を間違えるほど、彼らとは似ている。したがって彼らがわれわれに非常に好意的であるのは事実である。米国南部でされたような嫌な顔をされたことはもちろん一度もなかった。しかも彼らは非常に熱心なカソリック信徒でもあり、日曜など教会は多勢の人々で満員であり、楽天的、陽気なメキシコの顔は真剣なる信者の顔へと引き締まっているのであった。しかし、彼らは事お金に関しては非常に掛け値をする。これさえなければ本当に面白い国であるのに……つぎのオリンピックを見に行く人は注意しておくと良いと思う。たとえば闘牛場で闘牛の角を買おうとする。絶対に必要な言葉「クワントス」と聞く。売手はいう「六〇ペソ！」（約千八百円）しかしまず「いらん」という。値は落ちて「五〇ペソ」。またしても「いらん」。四〇ペソ、三〇ペソ、ついに僕なぞ二十五ペソ（約七百五十円）で立派なのを買ったものであった。とにかくメキシコへ行ったら値切れ、これがこの国に関してはいえるのではないかと思う。

第二印象は、メキシコはどんどん新しく伸びつつあるということ。オリンピックのためか、新しい道路、学校、病院、アパート、とにかく作っているものは全て素晴しいものばかりであった。アメリカの後押しのお陰だ、という批判もあるが、正直いって全くおどろかされた。新しいものは素晴しく、そしてラテンムードを取り入れ、全てはどんどん建設されつつあったのであるが、しかしこれはメキシコ市内だけであって、少し郊外に出ると貧しく、洗濯、炊事等の水をきたない小川に頼っているのも事実である。

また、アメリカでは、あれほど歴史作りに必死になっていたのに、ここでは全くそれを忘れているのではないかとさえ思われたのである。たとえば紀元前二千年に作られたというピラミッドがメキシコ市郊外約三〇キロのところにあるのだが、そこへ行けば、まだ土器や埴輪人形等々が落ちており、アメリカでは百年はおろか五〇年くらい前の家具でも「資料」として堂々たる博物館に陳列されていたのに、何とここではそのような四千年前の遺物が子供のアルバイトとして、観光客などに売られているのである。しかし、これと比べるなら日本だって五十歩百歩、他人事として笑って見ているだけでは済まされないのではなかろうか。所得倍増策もよかろう。万国博覧会誘致もよかろう。そしてオリンピックも大成功に終わった。しかし自分自身もう一度じっくりと眺めてみるのも、これまた必要ではないだろうか。……と思いつつ僕たちはメキシコを後にした。

（商学部四回生）